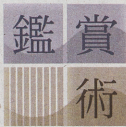


柘屋 友子

ますや・ともこ 1961年長崎県生まれ。ニューヨークで美術史の博士号を取得。米メトロポリタン美術館学芸研究員、国立民族学博物館助手などを経て、東大東洋文化研究所教授。専門はイスラム美術史。



ももありがたう。とりわけ心安づく組み合わせの色彩と、緻密に作られた図案を建築の外に加えて装飾の美しさは比類ない。東西・新旧で共通点を持ちつつも、それぞれ変化に富むイスラムの建築装飾の面目をお伝えできれば幸いです。

壁面を覆う文字  
イラクやイラン、その東

の地域では古代から煉瓦が建築に用いられた。煉瓦積み表面は土色でざらざらとしていて見栄えが悪いため、紀元前6世紀には施釉煉瓦が用いられた。施釉煉瓦とは、煉瓦の一面のみにガラス質の釉薬をかけて焼いたもの。施釉面が煉瓦積み外側に並ぶように設置され、建材であると同時に色彩と光沢をもつ陶質を壁に表出させ、建築を飾った。イスラム時代初期には、煉瓦の並べ方によって生み



シャイフ・ルトフルラー・モスクの施釉煉瓦ドーム (17世紀) — 深見奈緒子撮影

ちないように、表面に張るだけのタイルではなく、構造の一部を担う施釉煉瓦が外壁の装飾手段として選択されたのだ。最初に空色が使われたのは、土色と対照をなして鮮やかな色彩を

## 外壁包む施釉煉瓦の装飾手法

# 空に映える鮮やかな青

日本ではなじみの薄いイスラム教だが、信仰される地域は広く、その影響は生活や文化に色濃く表れる。東大教授の柘屋友子さんが建築装飾から見る美の世界を案内する。

7世紀初頭にメッカで預言者ムハンマドが興した一神教イスラムは、現在では西アジア、北アフリカを中心に中央アジア、南アジア、東南アジア、さらには世界各地に十数億人の信者をもつ。イスラム教徒の多い地域を旅行した方なら、イスラムに独特な形式を備えた建築物に目を奪われた経験

出される凹凸や煉瓦に施された浮彫によって、幾何学文様やアラビア文字を描き出す3次元的な装飾手法が好まれるもの一つは、ウスマン・モスクにみられるような、バンナーイーと呼ばれる建築銘文タイプ。煉瓦の四角形で構成することのできる直線的な文字が、決められた図形の中に

耐え、はがれ落し、その呈色剤である銅が入りやすかったため。時代が下るにつれ、藍色、白ほか、色数も次第に増えていった。施釉煉瓦による装飾で印象的なもの一つは、ウスマン・モスクにみられるような、バンナーイーと呼ばれる建築銘文タイプ。煉瓦の四角形で構成することのできる直線的な文字が、決められた図形の中に

る配置されている。「神」「ムハンマド」といった大切な名前を単独で表すこともあれば、聖典コランからの引用文を、ムスルマの正方形内に収めることもある。文字だけでは伝えきれない、幾何学的な文様だと思ってしまうかもしれない。

## 際立つドーム

イスラム建築を特徴づけるドームも、煉瓦造の場合には外側で施釉煉瓦で覆うことがある。ドームはイスラムの宗教建築であるモスクにおいて、メッカの礼拝の方向をはずし、羅マ・アラブの前の空間に架けられることが多い。空にそびえる鮮やかな色彩の丸屋根は、厳粛な祈りの場の存在を外観から想像させる。17世紀になると、ドーム装飾はさらに複雑化し、イランのシャイフ・ルトフルラー・モスクなどは植物文をアレンジした多色のデザインも現れた。あらかじめ個々の煉瓦の配置を念頭におきつつ、精密にデザインを作曲するのに加えて、ドームの曲面を覆うため3次元で計画する必要があった。さらにそれを高い位置に設置しなければならぬという困難さもあった。遠くからも文様が見えるドーム装飾は、技術の粋の結晶と言える。